興南撤収作戦

興南撤収作戦は、世界戦史上、最も大規模な成功した海上撤収作戦（民間人と軍人）である。

この作戦は、1950 年 6· 25 戦争当時（咸鏡南北道）で作戦中だった味方主力部隊が興南港を介して大規模な海上撤退を断行した軍事作戦である。

1950 年 10 月 1 日東海岸で 38 度線を突破した国軍は、北朝鮮共産軍の追撃を続けて、万境界線まで北進した。又、米軍は長津湖側・恵山側に進んだ。

しかし、11 月末、不法介入した中共軍が全面攻勢を敢行して出てきた国軍と国連軍の各部隊は険しい山間の谷で包囲網を辛うじて脱し、後退していくしかなった。国軍が 12 月 10 日ソンジンを出港して釜山に去った後、この地域に残った米軍と国軍は興南に集結して、米軍の指揮の下、撤退をすることになった。

12 月 15 日以後、次々と米海軍が興南港を脱し、最後の防衛線を守っていた米軍が 12 月 24 日最後に興南撤退は正常に終了した。

海上撤収作戦で国軍と国連軍 105,000 人の兵力と 17,000 台の車両をはじめとするほとんどの機器と材料を移しただけでなく、91,000 人にのぼる北朝鮮難民たちも救出した。

興南撤収作戦は二次世界大戦当時のフランス北部でナチスドイツ軍に包囲された 35 万人の連合軍がすべての軍需装置および材料を放棄し、1940 年 5 月、フランスのダンケルク港を介して正常にイギリスに避難したダンケルク海上撤収作戦に次ぐ成功した海上撤収作戦に世界戦争史に残るだろう。

< 흥남철수작전 이동 경로 >

米戦闘団の兵士たちだけでなく、イギリスの海兵隊員、韓国人兵士、大韓民国警察も参戦した。険しい山岳地帯を経て撤退するのに大きな困難を経験した。写真で韓国人兵士たちが先頭に立って移動するのを見ることができる。

1950 年 12 月 10 日撤収する米兵士、北朝鮮の住民の姿である。これらは中共軍を避けて自由と生命の世界大韓民国に行こうとついて行ったものである。これらの北朝鮮の住民のために撤退する米軍は、多くの困難を経験したが、北朝鮮の住民が近い距離で動くように避難を可能にした。

この航空写真は、蓋馬高原山岳地帯をかきわけて撤退する国連軍の隊列の姿である。国連軍は、大群に取り組む中共軍包囲網をくぐって興南に向かって進軍していた。北朝鮮避難民も興南港を経て大韓民国に行こうと国連軍に沿って出た。

米海兵隊と米陸軍の生存兵士で構成され、一時的大隊、英国海兵隊員、韓国人兵士、大韓民国警察の一時キャンプ周辺に集まっている数千人の北朝鮮の避難民たちの姿である。これらの国連軍は、興南に向かって撤退するところだった。

中共軍は国連軍との戦闘を開始する前に、その地域の耐えがたい厳しい寒さと食糧不足で苦戦をしていた。これらの理由から、戦い初期から中共軍捕虜は増え始めた。戦闘中に逮捕された囚人たちも多かったが、寒さと飢えに自発的に投降してくる捕虜たちが多かったからであった。一時的大隊の兵士が中共軍捕虜を監視している。

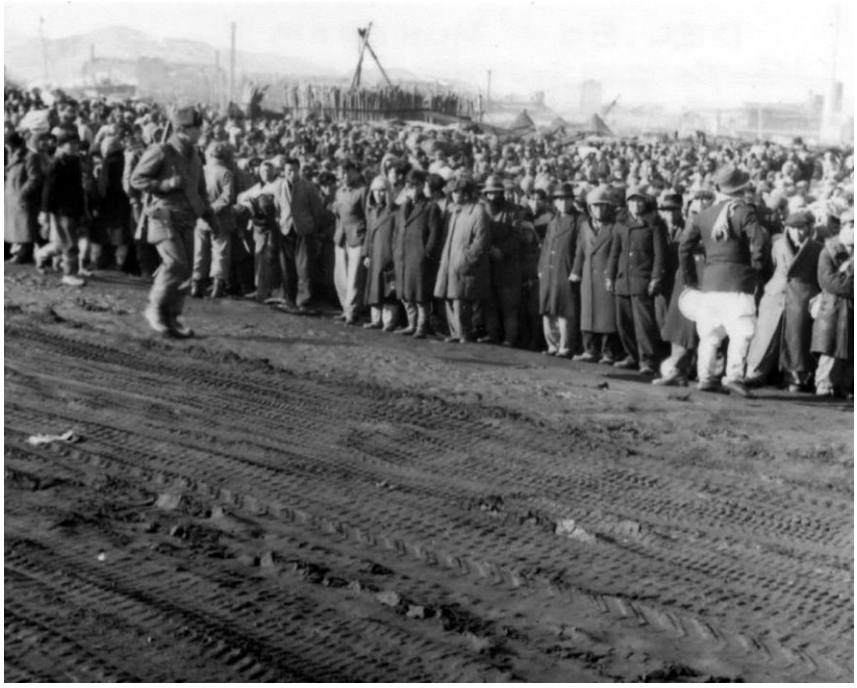
撤退する国連軍

中国軍の突然の攻撃を受けた米海兵隊兵士たち。米海兵隊１師団長は「撤退するのではなく、他の方向に攻撃することである。」という言葉で兵士たちを激励した。

興南港を出港して東海に面した江原道墨湖に離れようとは国軍首都社団兵士たちが集まっている。

米軍上陸艇（LST）に東海の興南港を脱出する避難民を乗せている。

興南の外航で上陸艇から大型船舶に移して乗る北朝鮮の住民達。

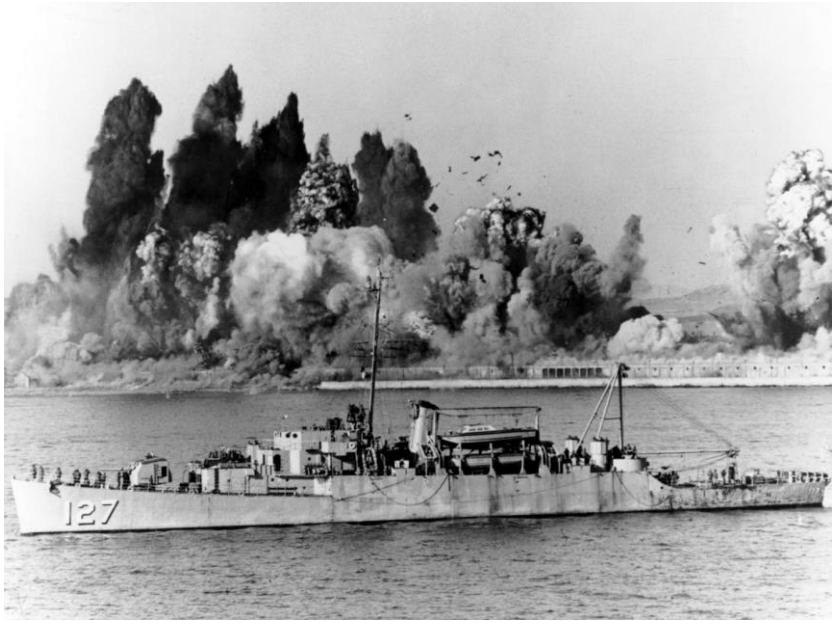


1950 年 12 月 22 日、興南港に集まって、自分たちを乗せてくれる番を待っている北朝鮮住民とこれらを制御する米陸軍歩兵3師団の兵士たち。北朝鮮の住民は今、興南港を介して船に乗ることだけが共産主義治下で抜け出し、自由な世界への道だった。

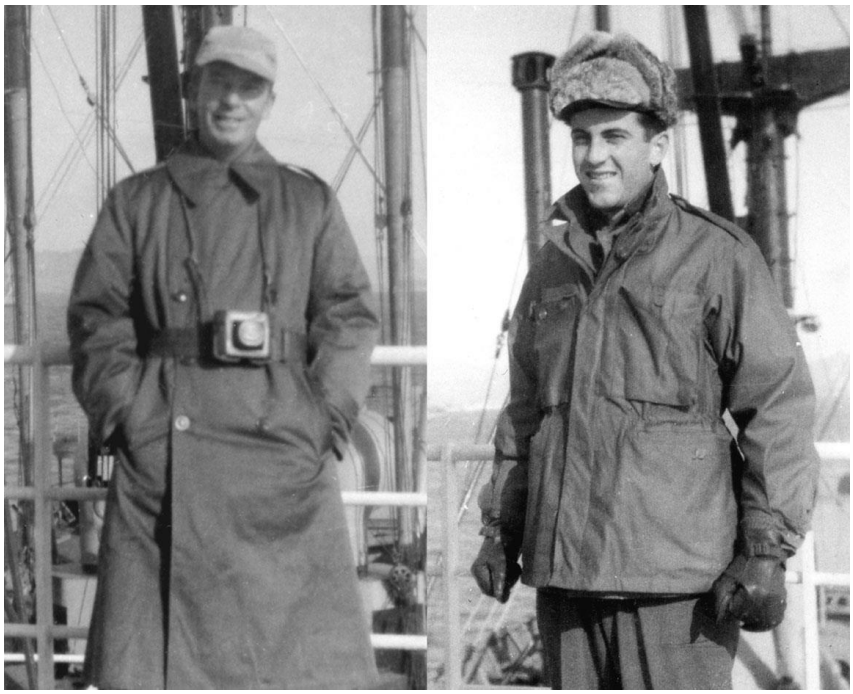
興南撤収作戦

中共軍の攻撃で東海岸の興南港に集結して回収のために待機することは、撤退する軍の兵力だけでなく、様々な軍需物資と装備も同じだった。興南港に集結した軍需物資と装備が豪華になった。米軍が指揮する国連軍は、この多くの材料を放棄し、避難民を救出する決断を下し、興南生命救出作戦を正常に進行した。

1950 年 12 月 24 日興南港の爆破シーン



国連海軍司令部の着陸支援団の爆破チーム所属のビゴール号興南港のすべての軍需物資と港の設備を爆破した。米軍は今後の戦いのために必要な爆薬と軍需物資の代わりに避難を救出する人道生命救出作戦を展開しました。避難民を救出し埠頭に残った爆薬と軍需物資をそう爆破して中共軍が残した物資や港を使用できないようにした



北朝鮮の避難民 14,000 人を救出した米国の貨物船メロディスビクトリー号のレナードナチュラル船長（左）とロバート･アニー事務長（右）

1950 年 12 月興南撤収作戦当時、北朝鮮の避難民を乗せて最後に興南埠頭を出発した米国の貨物船メロディスビクトリー号 3 日間の航海の後、北朝鮮の避難民 14,000 人の航海の途中で生まれた 5 人の赤ん坊を乗せて 12 月 26 日、自由民主主義国大韓民国の巨済島に到着した。

韓国のシンドラー　현 봉 학(ヒョン ポンハク)医師

1950 年 12 月当時、北朝鮮を占領していた米軍と韓国軍は予想していなかった中国軍の介入により、撤退を急いでいた。軍人の撤退も難しいさなかに民間人の撤退は考えてもできない状況だった。数十万の咸鏡南道と興南の住民が再び共産治下で苦痛を受ける直前の状況だった。

この時、これら救うために一人の医師が出た。セブランス医学専門学校 1944 年卒業生であり、当時の米 10 軍団の顧問として勤務していた현봉학(ﾋｮﾝ･ﾎﾟﾝﾊｸ)であった。

敬虔なキリスト教徒であった현봉학は、北朝鮮が再び共産党の支配下に置かれる場合クリスチャンを含む住民への迫害は、火を見るよりも明らかだと思った。彼らの

痛みを十分に予見しながら無視することはできなかった。彼は自伝で「私は焦燥に夜を明かした。することができれば何であっても尽くすと決心した。」と記録している。彼はその記録のように全てをした。米 10 軍団司令官であるアーモンド所長に会って民間人避難を助けてくれ懇願した。

“あのかわいそうな避難民をそのまま捨てて行けば彼らは共産党に皆死にます。 彼らを助けてください。 彼らを救わなければなりません。 彼らは共産党が嫌いで自由を勝ち取って出た人々です。 彼らを助けてください。”

実際には司令官の立場から見れば、困難な問題が多かった。軍団の兵力の撤退が優先なのに多民間撤退を上部の指示なしに単独で決定できなかった。興南埠頭の施設も多数の避難者を避難させるには劣悪だった。もしかしたら避難民の中、北朝鮮軍が混じっているかもしれないことだった。しかし、현봉학の再三の説得とポニー大佐、民事部始め局長、第 1 軍団長金白一将軍の助けを借りて、最終的に司令官を動かした。アーモンド所長は軍艦を利用した民間人の撤退を決定した。北朝鮮の同胞たちは興南を残して韓国に向かった。避難民たちは、船舶の隅々だけでなく、車両の下、装甲車の上で「モーゼの奇跡」のように、紅海を渡る心情的で巨済島に避難した。

国連軍（個人）の所感

メロディスビクトリー上級船員だったアメリカ人ロバート ロニはお母さんに送った手紙

“甲板にはゴミと人々の排泄物で悪臭が漂いました。水もトイレもない貨物船に1万 4千人が沸き立つ不潔さを想像してみてください。零下20度厳しい寒さに勝つために子供たちを懐の中に入れた夫婦が互いに抱いて地団駄を踏む姿を見て泣かなければならなかった”

興南撤収作戦総指揮官アルモンドゥ将軍の副官アレクサンダーハーグ(後で国務長官)

“彼らが敵国国民という事実はどこの誰に何の問題もならなかった。---そのことは何とも比較されることはできない‘人間生命の問題’というものがその時の確信だった”と述懐した。

レナードナチュラル船長

“忍耐して避難者1万4千人を小さな船に非常に多くの人を乗せて、たった一人も事故せずに無事に輸送したのは、神がされた日”と感激していた。

현봉학は、自分を誇る人ではなかった。彼は自分を「韓国のシンドラー」と呼ばれる人々に「私はしたことは何もない。」と手で遮ったそうだ。むしろ彼は、自分が今までミスをしたではないか反省をしていた。「韓国戦争時、故郷の避難者を興南から撤退することができるよう助けたが、私は少なくとも百万人の離散家族を作った張本人に違いない。」もしかしたら、不要な離散家族を作って自分たちの生活を壊したのでは悩んでいたのだ。今後「離散家族再再会と再会は私の生涯を置いて努力して成し遂げなければならないことだ。」

しかし、彼は自分がそのように統一を見ないまま、2007 年 11 月 25 日、自分の半生を送った米国ムウィルレンバグ病院でこの世を去った。